

法華經の音声

宗教と芸道

一 芸から道へ

中世は、さまざまな芸能が、口伝と師資相承を伴って「芸道」として立ち現れた時代と捉えられる。拠って立つ政治の体系の大きな変動や、新しい価値観や文化が次々と生まれてくるような社会の胎動が起こった平安末期から、故実を探り淵源をたずねる傾向が強くなっていったことは想像するに容易である。あらためてそれぞれの分野や方面における正統性が問われるようになり、個々の専門性への意識が明確になった。それに伴って、〈道〉の概念が生じ、やがてそうした指向そのものが文化を形成する大きな潮流ともなっていく。

法華經読誦もそのような文化の大きなうねりの中で、芸道として熟していったことが確かめられる。読経は、正確な字音の読みに加えて音曲面が重視され、秘事口伝を伴って、徐々に芸道としてかたちを整えていった。「読経道」ということは、弘安七年（一二八四）に能言によってまとめられた『読経口伝明鏡集』に見出せる。

芸能とは、もともと学問的な技能のことを指すものであった。さらには社会的な職能を指す語だった。それが、平安末期ごろより、管弦や舞楽、武芸などにまつわるものを特定して指す例が見られるようになり、芸能の語のあらわす内容も現在の意義に近くなる。それに伴って、より専門的な知識や修練を必要としていったと思われる。ここに「芸道」が徐々にかたちを成していく。小西甚一氏は、道は「専門性・継承性・規範性・普遍性・権威性」を実質とし、厳しい修練を通じて形成されていくのだとして、やがて、道そのものが時代を形成する中心理念となり、中世がまさにその時代であると述べる。そして道の理念の発生は、専門性の意識が明確化してくる十二世紀に求められるだろうとしている。もともと宗教的意味合いを色濃く持つ道の概念が芸能にも及び、「道」として自覚されることによって体系化が図られるのである。そこには、すぐれて専門的な口伝が伝わり、また書物として書か

れることによって、にわかに輪郭がはつきりとしてくる。流派が生まれ、秘事口伝を支える説話伝承もまた生ずる。系譜がたえず意識されるようになるのである。

読経道を、そうした大きな流れの中に置いて考えることは十分有効であろう。読経もまた、口伝が体系的にまとめられ、音曲面が重視されて、平安末期から鎌倉期にかけて芸道として熟していく。さまざまな芸能のありようと、軌を一にしている点で、中世的な芸道のあり方を考える恰好の素材である。私は、読経道は、俗人の関与によってこそ、芸道として確立したのだと思う。極くはやい時期から寺院内にて専門化した声明とは明らかに異なるのである。芸道と、宗教と、学問とで三つの円を描いたとすれば、それぞれが重なり合ったその結節点に位置しているのが読経道であるとイメージできよう。

さて、ここでは、読経道の全体像をおおよそ辿ると同時に、宗教と芸道とが互いに交差してこの読経道が形作られ、発展しているのか、具体的に探ってみたい。

二 〈読経道〉とは何か

まず、〈読経道〉とはいかなるものであるか、現在までに明らかになったその特徴を押さえておきたい。要点をまとめて掲げれば、次のようになろう。

- I 『法華經』の字声・清濁・音曲の三事の修練を柱とする。
- II 僧のみならず、俗人も能くした。
- III 師資相承を伴う（いくつかの異伝有り）。読経道の音曲の（伝説的）始祖は、平安中期の道命阿闍梨。中興の祖は、後白河院に擬される。
- IV 実際に、後白河院・後鳥羽院・後嵯峨院らが、読経道の形成と発展に深く関

柴 佳世乃

V 十三世紀後半に、体系を持った口伝書（＝『読経口伝明鏡集』）が撰じられた。そこにははっきりと「流派」の意識が見て取れる。芸道として形を整えるのは、おそらく平安末から鎌倉初期。

本書冒頭には、

夫れ以みるに、読經の芸を嗜まんと欲せば、須らく先づ明師に遇ひ、専ら三事



とあり、これが読経道の根幹となる三つの点である（前掲Ⅰ参照）。以下、この三点に沿って記述され、特に三点目の音曲条には、秘説・口伝が多様に載せられており、説話の類も少なくない。芸道化していく過程で、音曲的側面が洗練され詳細な故実が付加されていったことを示しているよう。

経道の流派形成を考える上で示唆に富む。

ここには、『明鏡集』の著者能譽や、その師良能らの名が見え、また後白河・後鳥羽・後嵯峨院といった、読経道の形成に深く関与した人物が連ねられている。時代を経て、このような系譜が描かれ、視覚化されるようになるのである。系図そのものが読経道の〈説話〉を形作っていると言ってもよからう。天皇・院の系脈は多分に象徴的意味合いを含んでいるが、そのうち後白河から後嵯峨への流れは実態に即したものと考えられ、鎌倉中期においては、良能―信昌と能願―祐宗とが拮抗するふたつの勢力であったことが、諸資料にも確認できる。院御所での御読経が整備され、信昌・祐宗が並び称されるようになり（『元亨釈書』音云志にくわしい）、また個別に貴顕に能読の説を伝授するに至って、自流・他流の意識が確立していったのだと思われる。『明鏡集』が撰じられたのはちょうどこのころであった。法華経持経者として名高い性空上人開山の書写山は、都の読経の隆盛を承けて読誦のメッカとして繁栄していくが、右の系図はそのような事実を如実に伝えるものとしても貴重である。

さて、読経の流はこればかりではない。例えば、『明覚流』なる流が確認できる。平安後期の明覚を鼻祖とする明覚流は、六内（喉内、舌内、唇内、鼻内、口内、齒内）の発音を説の基幹に据えた読誦の流であり、能譽の記し留めた読経道とは異なつた体系を持っている。『法華秘中略敷抄』が一流の相伝書として厳密に相承された。その成立は少なくとも鎌倉末期には遡ると推測される。『略敷抄』は、寛治七年（一〇九三）明覚撰というが、おそらく偽書であつて、ほかに、一流に連なる俊誉による永和四年（一三七八）の一連の伝書（『法華経声図』他）が存在する。明覚流の血脈は次のようなものである。

明覚―忍助―運誉―観沙―寛勝―寂雲―貞覚―円実坊阿闍梨―鏡円―明賢―賢秀―道昌―眞昌―幸円―俊誉―良運―良重―幸尊―円兄

（文章系図を線系図に起こした）

明覚流伝書を傍らに置くと、『明鏡集』に著された都での読経の隆盛や、読経道の流派・体系が相対化できる。読経道の広がりとともに、異なつた体系のこうした流が生まれ、そこには明らかな位相差もみとめられる。

平安末から鎌倉初期にかけて、王権と密接に結びつくことによって、読経は飛躍的に芸道化の道を辿る。いくつかの読経の口伝書があらわれ、やがてそうした潮流

は都の中央だけに留まらず、各方面において読経の口伝化、芸道化をも生む。明覚流などはその好例であつて、前代までの厳密な字音の学問から一歩進んで、独自の体系を打ち出しつつ、中央での口伝をも取り込んで説を形成している。

このように、系譜や口伝書を伴つて〈読経道〉なるものが確かに存在し、またそれは時代を経て多様に展開していったことが徐々に明らかになってきた。

三 宗教と芸道の交差

さて、この読経道は、信仰と芸道とがいかに切り結んでいるところに成っているのだろうか。もとより『法華経』の読誦を行うものであり、つよい法華経信仰に支えられていることは言うまでもないが、それが芸能として、さらに芸の道として確立していくにあたって、信仰と芸道とはどのように交わつていったのであろうか。それを口伝書のなかに具体的に辿つてみたい。

まず、『読経口伝明鏡集』の能譽跋文に、次のようにある。

但情事の意を案ずるに、人間界に生じて無量無辺百千万億那由他阿僧祇劫の中に於て、適今度受け難き人界の生を得。然して或る経に云く、人間に生ずることを得るは、梵天より糸を下して遙に海底の針の耳を貫くより猶ほ難し。^{取意}此の如き受け難き人界の生を得るのみに非ず、剩へ亦此の經典に値遇する事、譬ふれば優曇花の如し。（中略）凡そ此の如く値ひ難く聞き難きの妙法花経持者と為て、多年稽古の功勞已に五十余歳に及び、一期転読の薰修正く一万余部に至る。此の如く功を積み徳を累るは、偏に只今生一世の結縁に非ず、皆是れ多生曠劫の宿因なり。情これを案ずるに、過去遠々より此の経に値遇し、亦未来永々に至るまで此の典に随逐す。然れば則ち、来世の得脱に於ては更に以て何の疑ひ有るべけんや。（『明鏡集』四六ウ・四七オ。傍線部引用者、以下同）

ここでは、受け難き人間界に生を得て、そればかりでなく『法華経』にめぐりあい持経者となつて五十年余りが過ぎ、すでに一万部あまりを読誦したことが記され、来世の得脱を祈念しつつ自らを省みている。また続けて、『明鏡集』の撰述については、

是に以て、石火光中、露命未だ尽きざる前に、直ちに一卷の抄物を撰じ、専ら

一期の思い出に為む。これを以て永く後代に貽し留め、遍く一切衆生を利益せむ。仍て上代の先哲の典籍等、亦た中古の能説の口伝集、この外猶ほ能譽壯年の昔より長大の今に至るまで、一期稽古の秘事曲、案出に随て、綴り集むる所なり。これを名づけて読経口伝明鏡集と曰ふ。これ併しながら初心の者の為なり。更に已成の人の為にあらず。もし猶ほ紕繆相貽さば、後賢これを直すべし。兼ては又自今以後未來に至るまで、相統仏法の恵命と為む。將た又花洛迦土を漏さず、読経稽古の輩を覚悟せしめんが為なり。これ則ち末代の明鏡なり。これ則ちこの道の肝心なり。然れば、早やかに当流の門徒に於ては、速やかにこの口伝明鏡集を以て専ら指南と為べきなり。

と述べる。なお、点線を引いた部分は、〈道〉〈流派〉の意識がはつきりと打ち出されている箇所である。右条に、自利のみならず利他の行いに説き及んでいることは注意されよう。仏法を担う者の意識が打ち出されている部分である。右は書物を著す行為について言ったものであるが、読経の実際においては、『明鏡集』本文の音曲条に、師良能の口伝として次のようにある。

先師の語りて云く、読経の間、品移り並びに巻移りをば、品第一とも三とも、又巻第一とも二とも、さはく、と聴聞衆の耳に明らかにこれを聞かしむべきなり。是則ち、能所俱に謝惡持善の為の故なり。(四〇ウ)

「能所」すなわち能化・所化両者に利益するものであることをうたっている。聴聞する人々の耳によく届くように經典の読みを工夫すべきだというのである。先の自利・利他の思想とも連なるものであろう。

さて、読経道で肝心なのは音曲の側面であるが、ここにも、というよりここにこそ宗教的要素が満ちている。例えば、

一、音曲を習ふべき事トアル所ノ真書云ク、

夫れ音曲は、劫初より以來未來際に至るまで更に断絶有るべからざる事なり。音を以て一切言語に通ずる故なり。音無ければ更に一切の事物を成ずるべからず。然れば則ち、仏在世にも声明を以てこれを用ゐる故、五明の中に声明尤も殊勝なり。これに依り、一切の仏事作善法会の儀式、皆悉く声明を以て旨と為す。然れば大師の尺にも、音仏事を作す、これを名づけて経と為す。又大師尺に云く、音則ち是れ仏体なりと云々。(二四ウ)

音曲は、すべての言語に通ずるものであるから、過去未來にわたって断絶無く、全ての根源であるという。また音が仏の信仰そのものであり、それが「経」というものであつて、さらには、音そのものが仏体であるとも説く。ちなみに、この「声仏事を作す」は、経疏類に見える文言で（阿部泰郎論にくわしい）、日本においても『三宝絵』などに広く引かれているが、それらには「声による仏事」と解されて、声に出して経を読んで仏事をなすこと、と理解されているようだが、そうではあるまい。声でもつて仏の徳をあらわすことを意味するのである。

以上は『明鏡集』によつて見てきたが、明覚流の伝書『法華秘中略敷抄』ではどうだろうか。

問ふ、第二に、性の根源を明すは云何。

答ふ、四性は一代の金言、諸の仏の惣言なり。一切情非情、性を備へずと云ふこと無し。涅槃經に云く、一切衆生悉有仏性と説く、此れなり。而るに体に有る時は、則ち性と名づくる故に性抛内を謂ふ。(中略)用に有る時は、則ち声と名づくる故に声仏事を成す。これを名づけて経と為す。(一ウ。私に訓み下した。『略敷抄』は、先ず、重要な六つの次第を問答体で説き明すが、本条はその第二にあたる。)

明覚流は、四性（四声）とは何か、その根源を明らかにすることを説の根幹に置いている。文字の読み方を示す四声を、普通の「四性」に敷衍して解釈し、この「性」の理解が一流の口説を形作っている。「性」とは「仏性」に通ずるものであり、ひいては「四性」は仏の言葉であるというのである。ここでも同じく、「声仏事を成す」の文言が引かれている。さらに「四性とは、文字の莊嚴なり」とも記されている。こうして、明覚流においてもまた、根源的な声の思想を含み込んだ、仏への信仰が軸となつてることが明らかである。加えて、次のような文言も見える。

私に云く、一代五時の説法は併ら四教なり。四教は如来の四弁なり。四弁は四性なり。故に法華読誦の輩は、一偈一句なりと雖も、性を讀む時は、啻だ自身の得益のみに非ず、聴経結縁の人、機に随ひて四教の益を得るなり。是れ実に済度群生の方便なり。兼て又即身成仏の軌範なり。持経家に於ては、深く此の旨を得て十界共に廻向すべきものなり。(二ウ)

先の『明鏡集』の聴聞衆を意識した自利・利他の行いへの言及と相通ずるもので

あろう。「四性具足の読誦を以て大乘修行と云ふ」ともあり、天台学的な教理に照らしつつ、読誦そのものが大乘の修行であることが明確にされているのである。

*

さて、「芸道」という観点から読経道を眺めるとどうであろうか。芸能的要素をもとより含み込んだ読経が、やがて道として体系化されていくにあたって、看過できないのは系譜意識である。

『明鏡集』は、「上古の能読」として読経に堪能な輩を次のように記す。

就中、高名録ト云書ノ中ニ上古之能読ノ名字等載之云。付俗
弘秀 尊連 慈恵御弟子 慶田大僧正弟子 光義 材憲
慈恵弟子 円久弟子 明尊僧正弟子 慶田大僧正弟子 永寿 法橋 永覚 宮阿闍梨
道命 良命 明意 円任
俊房 堀川左大臣 定頼 四条大納言 已上十四人

（引用は永正本。文安本は師資の注記がなく、後に文章で師資を説明している）
「高名録」なるものを引きつつ示された人名は、既に指摘されるように、「二中歴」の名人歴「読経上手」にはば一致する。

読経上手 付俗

弘秀 尊連 慈運 円久 光義 林憲 道明 良命
永寿 法橋 永覚 宮阿闍梨

『二中歴』は、先行の『掌中歴』『懷中歴』（十二世紀初）等をもととして順徳天皇の時代に編纂された（その後も書き継がれた）とされるもので、この「読経上手」の列挙がいつから伝承されていたかは不明であるが、ただ他にも「芸能歴」「一能歴」「名人歴」などと、ある枠組みで堪能な人を列挙し集成していく意識が強くあつたことは興味深い。『明鏡集』をも勘案すれば、少なくとも鎌倉以前にすでに「読経上手」という枠組みが存在し、その人々が伝承されていたことがわかる。さらに『明鏡集』では、「高名録」の人名を一部師資として捉えているのも注意される。

前代に遡って能読の輩を把握しようとする意識は、やがて系譜を生成し、さらに諸流を生み出す温床ともなる。「読経音曲」の始祖として読経道の系譜に大きな位置を占めているのが、右のなかの道命であった。鎌倉中期における読経道の流派

意識は、能嘗によれば、次のように記されている。

夫れ先師大僧都良能、九重第一の能読、仙洞参勤の長者なり。然る間、一天に名を揚げ、万方に譽れを弘む。これに依り、自門他門南都北京、惣じては近国遠国諸寺諸山より来臨の門弟、雲の如く聚まり、星の如く烈なる。就中、能嘗は年来随逐の弟子たるの上、本より亦た外戚舅甥の間、信昌と能嘗、この二人に於ては、故に子細他に異なるに依り、読経音曲の固実と云ひ、四声清濁の口伝と云ひ、一事貽さず相伝する所なり。この故、事に於て聞き及ばざる無く、曲に於て伝へ漏らす所莫し。この故、字声実に珠を盤ぎ、清濁専ら響きを分かつものなり。凡そ當だ当流の淵底を究め嘗るのみならず、重ねて亦た明師に遇ひ、諸流を尋ね伺ふ所なり。（二才、前文）

とあつて、能嘗の諸流に互る研鑽の様子が描かれる。能嘗の師は良能であるが、その他にも幼少のころより九人の師に習ったといひ、自らその時期と人名を挙げて記している。それぞれに口伝を持った人のもとをたずねる態度は、さらに、

大方面々才学各各、屈曲意巧等区なりと雖も、一言して更に金玉に非ざる無し。而して、一流稽古の功、何の不足あるべき。況や諸流兼学の勞、豈に満足せざるべけんや。故に、自流と云ひ、他流と云ひ、覚悟せざる無し。譬ふれば、一切大小諸水流、大海に入るが如し。この読経諸流の稽古、亦た復た此の如し。嗚呼、知の難に非ず、能の難なり。又或る文に云はく、学ぶ者は牛毛の如く、成る者は麟角の如しと云ふ、と。この理、実なるかな。（三才）

と記され、諸流の稽古という文言も繰り返し出てくる。能嘗が実際に読経の研鑽を積んでいた十三世紀半ばには、それぞれに口伝を持った能読たちが活躍していて、比較的自由にそれらの間を行き来しつつ音曲を修得していったことがわかる。

読経においてもっとも重要だったのは音曲に関する口伝である。高度に読経が洗練され、秘事口伝が事細かに盛り込まれるようになり、そこにこそ、学問から一歩進んで芸道化していく要因がある。能嘗が多くの師に就いて面授を受けたのは音曲の故実であつた。その様相は、例えば、

是等の作法（四句の甲乙）の作法ハ偈の部分の音の高低等の歌い方を言うか、皆上古の先哲、定め来たる所なり。これに依り、中古の能読等、同じくこの懸を以てこれを用ふ。仍てこの次第を以て最極の秘説と為す。然れば則ち、後白

川法皇、専らこの懸を以て殊に御秘蔵の由、先師大僧都（良能）語り申しき。

この事、口伝集有りと云々。（三二ウ）

のように記される。「四句の甲乙」とは、句のまとまりごとに決められた声の出し方、「懸」とは、音曲の微妙な音程の移りを指すと思われる。それに纏わる説は秘伝であつたといひ、また後白河院自身が秘説そのものの扱いにも関わつていたと、師良能から伝えられているのである。後白河院に関して言えば、さらに、

後白川法皇の御定に云はく、

昔より能読面々、読経の様も叩く様も区と雖も、所詮四句の甲乙を乱れずよむを、能読とは云ふなり。万事の秘曲は、心を閑めて能々すますべきなり。古今のあはれにかなしかりし事共を思ひ出て、目になうたのうく程にたにも心をすましつるに、経を読みつむする事なしとぞ御読経衆の中には仰せ下されける。

（三六ウ）

という読経の音曲の心構えが伝えられている。「心を閑めて澄ます」とは、和歌にもその他のいわゆる芸能にも通底するものである。音曲の具体的な故実、そして心得までもが徐々にわたちを成し、文言化されるに至る。鎌倉中期にはすでに読経道はこのような様相を呈していた。

さて、こうして芸道化の過程を進むとき、すこしく時代の下つた明覚流伝書のなかに、きわめて興味深い事例が見いだされる。『法華経声図』（俊誉撰、永和四年（二三七八）、「法華秘中略歎抄」に付随する明覚流の伝書）に見える、伝授に関する制法八カ条である。師資相承が崩れてきたことに対する危機感より、秘伝書『法華秘中略歎抄』の扱いや伝授の日数などについても具体的に示したもので、俊誉が嫡流相承に叶つた経緯も併せて記されている。かいつまんで要点をまとめ、次に掲げよう。

一、法華六内家制法條の事

夫れ以みるに、聖教は、是れ諸法の玄宗、諸仏の軌範なり。然るに、調茂く、道広くして其の源を究め難し。故に相承にあらざれば、誰か疑網を除かん。文頭かに、義幽かにして、其の際測ること莫し。故に相伝せざれば、誰か深旨を得んや。爰に明覚、心を内境に凝らして、六内の凌遅を非とし、慮を玄門に栖して、字声の訛謬を歎く。これに依り、密かに両巻を選び、忍助に伝付す。然

りしより以来、嫡々相承して断絶無き者か。然して俊誉声句伝受の功、兩年なり。高師これを感み、音義を授く。六内の暗誦の稽古の勞、一年なり。恩師、これを感じ、両巻の書を授く。然して後、剩へ、嫡流相承の印可に預かり、其の後、師範の住坊に於て、免許を蒙る。人に授くる事兩年、相伝の者数輩なり。俊誉は、嫡流相伝の旨、隠れ無し。当流に於ては、相伝の具書等は、敢て他人の知らざる所なり。若し此の書籍を聊尔に為さば、智人は、相伝無くして得解し、愚人は、誹謗の過に至り、身を謝し難きなり。然れども、俊誉田舎下向の次でに、人々の志黙止難きに依り、日数無くして彼の相伝を許し奉る。且つは冥慮知り難く先規に背く者か。これを以て古例とすべからず。向後に於ては、堅く此の制法を守るべき者なり。

一、伝受日数の事…（法華經の序品からはじめて、まず十日、さらに百日をめぐに授く。）

一、六内音義相伝の事…（伝授の稽古が終わつて百日以後に、音義を授けること。）

一、六内音義已後の書籍の事…（嫡弟のほかはこれを授けてはならぬ。また德行の者でなければ許さず。）

一、弟子の外此の書を許すべからざる事…（一部相伝の弟子でなくては、相承を許さず。）

一、相伝せずして此の書を盗書する事…（このような罪を犯した場合は、墮地獄となる。）

一、六内音義以下の書籍に奥書を帯びざる事

…（このような書は、たとえ同朋であつても奪い取るべし。）

一、相伝弟子、師の追善を致すべき事

…（七七忌までは、法華經一部を、内声を整えて読誦すべし。）

右条に背く者は、冥罰を蒙つて無間に墮ちることになる。よつて、堅く守るべし。

* 永和四年戊午二月一日の、俊誉の判。

右によれば、俊誉は、二年の修行ののち『法華經』の暗誦を一年行ひ、その上で「印可」に預かり「免許」を授けられた。本条は、その後、田舎に下向したときに伝授の日数少なくて相伝を許してしまった反省に立つて作成されたものである。

すでに免許・印可といった相承の規範が出来ているのも注意されよう。制法の各条は、極めて微細に及んでいる。ここまで具体的な取り決めが文言化され、相伝されていくのだ。これが十四世紀後半の実態の一齣である。読誦の広がりとともに相承そのものが崩れてきた結果、厳密に文言化することで血脈の正統性を保証し、嫡流相伝の存続をはかうとしたのだと思われる。明覚流の相伝を示すとともに、当時の読経道のありようをも彷彿させよう。

おわりに

仏教の儀礼・法会などを通して、貴族社会にも浸透していた読経は、高度に洗練されてゆき、音曲における秘説化をとらなると、芸道としてかたちを整える。そもそも宗教的な行いであった読経は、声とそれにとりまなう音楽性が重要視され、つまり技術的な側面もが重んじられるようになって、いわゆる「芸能」に近付いてゆく。読経たちは、仏の言葉を正確に、またゆたかな音声で莊嚴することを根幹に置きつつ、芸能としての鍛練を重ねていったのだ。寺院内で相承された声明とはもちろん密接な関わりを持っているが、声明とは異なると、僧俗交えて大変広く行われたこと（王権が積極的に関わったことを含む）が、大変重要な契機になっていくのではないかと私は考える。

最後に、少しく付け加えるならば、こうした読経の芸道（芸能）化は、日本のみならず、文化を越えて確認できる。例えば、中国において日本におけるそれと通底する興味深い現象が挙げられよう。澤田瑞穂氏によれば、宋代以降、『孔雀経』を専門に読誦する僧または半僧半俗の行者があり、その誦経の様子は「談経」として諸文献に見えるという。読経の功德で奇瑞を呼ぶものであり、また音曲的・演芸的な歌唱であったらしい。また韓国においても、「経匠」と呼ばれた民間読経師が読経を行っていたことが知られる。それら中国ひいてはアジアの文化的な繋がりを視野に入れた、こうした相互の類似した現象について、あらためて考える必要があるのではないかと現在考えている。

参考文献

- ・ 佐々木八郎『芸道』（富山房、一九四七年）
- ・ 小西甚一『文鏡秘府論考』（大八州出版、一九四八年）
- ・ 林屋辰三郎『中世芸能史の研究』（岩波書店、一九六〇年）
- ・ 石津純道『中世の文学と芸道』（至文堂、一九六一年）
- ・ 小西甚一『道——中世の理念』（講談社、一九七五年）
- ・ 馬淵和夫『増訂日本韻学史の研究』（臨川書店、一九七六年）
- ・ 西山松之助『家元の研究』（吉川弘文館、一九八二年）
- ・ 『日本芸能史』二・三（法政大学出版部、一九八二年）
- ・ 桑田忠親『日本の芸道六種』（中央公論社、一九八二年）
- ・ 岩波講座『日本の音楽・アジアの音楽』（岩波書店、一九八八年）
- ・ 黒田俊雄『日本中世の社会と宗教』（岩波書店、一九九〇年）
- ・ 石黒吉次郎『中世芸道論の思想——兼好・世阿弥・心敬——』（国書刊行会、一九九三年）
- ・ 五味文彦編『芸能の中世』（吉川弘文館、二〇〇〇年）
- ・ 澤田瑞穂『中国史談集』（早稲田大学出版会、二〇〇〇年）
- ・ 清水眞澄『能読の世界——後白河院とその近臣を中心に——』（『青山語文』二七号、一九九七年三月）
- ・ 清水眞澄『能読の系譜——「読経口伝明鏡集」を中心に——』（『國學院雑誌』一九九七年四月）
- ・ 柴「『読経道』考」（季刊『文学』九卷一号、一九九八年一月）
- ・ 柴「法華経はいかに読誦されたか——城崎温泉寺蔵『法華経音曲』をよむ——」（『国語国文』六九巻四号、二〇〇〇年四月）
- ・ 阿部泰郎『中世の音声——声明／唱導／音楽』（『中世文学』四九号、二〇〇一年六月）
- ・ 柴「明覚と『読経道』」（隔月刊『文学』二巻五号、二〇〇一年九月）
- ・ 柴「『読経道』の展開——後白河院から後鳥羽院、後嵯峨院へ——」（『明月記研究』六号、二〇〇一年十一月）

読経道資料（本論者に取り上げたもの）

* 沼本克明『読経口伝明鏡集（故山田孝雄博士蔵文安本・川瀬一馬博士旧蔵文亀本）

解説ならびに影印』（『鎌倉時代語研究』一三輯、一九九〇年一〇月）※本文の引用は文安本により、私に翻刻。

* 築島裕『古辞書音義集成五 法華経音義』永正本法華経音義付載「読経口伝明鏡集」（汲古書院、一九八〇年九月）

* 柴「『読経口伝明鏡集』三千院円融蔵本 解題と影印―書写山をめぐる法華経読誦に触れて―」（お茶の水女子大学『人間文化研究年報』二二号、一九九九年三月）

* 柴「『法華秘中略歎抄』の翻刻と解説―明覚流の法華経読誦（一）―」（お茶の水女子大学『人間文化研究年報』二三号、二〇〇〇年三月）、『法華秘中略歎抄』付載四書の翻刻と解説―明覚流の法華経読誦（二）―」（『同』二四号、二〇〇一年三月）

付記 本稿は、科学研究費補助金（若手研究B）による研究成果の一部である。